

第5回「泉大津市オリアム随筆賞」

【佳作】

長暖簾

斉藤讓二・岡山県

修学旅行を間近に控えたある日のこと「なあなあ、おまえんどこ、いつ見ても定休ばかりじゃが、ひよっとして潰れたんか？」不意に投げかけられたクラスメートの言葉に、私は全身がかつと火照った。

高一の春（昭和四十年）わが家は喫茶店をオープンさせた。珈琲を飲ませる店など、瀬戸内の小さな町（岡山県笠岡市）には、まだまだ物珍しい時代だった。川沿いの通学路に漂う焙煎したての珈琲の香り。ドアが開くたびに店内から洩れ聞こえる軽音楽。「いいな、おまえんち」と、何人かの同級生からうらやましがられた。客足は順調に伸び、父は「水商売ちゆうもんは日銭が入るのがええ。これで借金さえなきやのう」と、うれしそうに晩酌の焼酎を注いだ。

しかし一年と数か月後、状況は一転。駅の近くに二軒、商店街の中ほどに一軒と、喫茶の店が次々に開業したのだ。町はずれのわが家に客足は遠のき、それでも父は踏ん張ったが、やがて「本日定休日」と書かれたドアプレートが風に煽られ、カラーンカラーンと鳴る日が多くなっていった。

「おれ、修学旅行にや行かんけえ」

出発の前夜、私はぼそりと母に告げた。わが家の困窮を考えれば、旅行に持っていく小遣いのことなど口に出せなかった。関東方面へ三泊四日の旅程である。級友たちはみな、決められた限度額いっぱいの一万円を持参するという。

「行かんけえ」と告げたまま黙りこくる私に「小遣い、一万円だったね」と、胸中を見透かすように母は言った。

春とはいえ、川伝いの夜道は冷え冷えとしていた。時折りふり返って「寒うねえか」と訊く母に、私は返事もせず黙々と歩いて歩いた。足早な母の背を追いながら（風呂敷包み抱えて、おかんはどこに行くんだろう）と、そればかりが気になっていた。

線路べりの路地の脇に、藍色の長暖簾が風にゆれている。暖簾の陰に身を隠し、母は格子戸をそっと開けた。道々ずっと気がかりだった母の行く先、それは質屋だったのだ。

「いつもすみません。きょうはこれでお願ひしたいんです」

「留め袖ねえ。で、なんぼ必要かね」

「一万円あれば助かるんです」

「うーん、せいぜい三千円とどこだね」

「なんとか一万円、頼みます、頼みます」

「困るんだよね。あんたみたいに何遍も流されちゃ」

「今回は取りに来ます、絶対に来ます、約束します」

「前もそう言ったんだよ、あんた」

「これが最後です」

「最後って、質草もなくなったんかね」

「この通り、この通り頼みます」

平身低頭したまま、母の両肩は小刻みに震えていた。

「仕方ないですなあ。一万円、最後ですよ、これで最後ですよ」

こうして母が工面してくれた一万円を握りしめ、私は無事修学旅行に参加することが出来たのだった。

皇居、国会議事堂、代々木の国立競技場などを見て回り、思い出の旅の最終日。箱根に向かう車中のあちらこちらに「富士だ、富士山だ」と、歓声が上がった。バスの車窓に富士が映る。春霞の空に、すうっと富士が浮かぶ。不意に目頭が熱くなった。やさしく広がる富士の稜線と、母の慈愛の両腕が二重写しになったのだ。

あれから五十年もの歳月が流れ、還暦をとうに過ぎた私だが、今もふと思う。質入れしたあの母の留め袖、その後どうなったのだろう。線路べりの質屋は、時代の波に吞まれて廃業し、川辺の喫茶店は、とっくの昔に他人の手に渡った。父は逝き、そして、あの日以來亡くなるまで、ただの一度も留め袖の話をせぬまま、母も逝った。もはや誰に尋ねるすべも調べようもなく、私は詫びるように流れる雲につぶやいた。

（おとう、おかん、もうすぐ秋のお彼岸だ。家族みんなで会いに行くからな。おれにも孫が出来て、女房と息子夫婦と三人の孫らと、アハハ、村一番の大家族だ。時にもめぐりはあっても仲良う達者で暮らしとる。おとう、雲の上で客足の心配なんぞしてないだろうな。おかん、孝行出来んまんまで、ごめんな。来世にや、留め袖でも振り袖でも訪問着でも、おかんの欲しいものは、なんぼでも買うてやる。長暖簾なんか、絶対にくぐらしやせんから。おとう、おかん、もう一遍、せめてもう一遍、会いたいのうち……）

あの夜母の背を追ったように、私の目は雲の行方をいつまでも追っていた。